夏目漱石
名は金之助。文學博士。大正五年歿、年五十。

一九　北滿の野

夏目漱石

橋本
作者の友人。

窓から覗いて見ると、何時の間にか高粱が無くなつてゐる。先刻迄は遠くの方に黄色い屋根が處々眺められたが、それもつひに消えて仕舞つた。此の黄色い屋根は綺麗であつた。「あれは玉蜀黍が干してあるんだよ。」と、橋本が説明して呉れたので、漸くさうかと想像し得た位、玉蜀黍を離れて余の頭に映つた。朝鮮では同じく屋根の上に唐辛子を干してゐた。松の間から見える孤つ家が、秋の空の下で、燃立つ様に赤かつた。併しそれが唐辛子であると云ふ事だけは一目で直ぐ分つた。滿洲の屋根は、距離が遠いせゐか、たゞ

茫漠たる單調を破る爲の色彩としか思はれなかつた。處が其の屋根も高粱も悉く影を隱して仕舞つて、あるものは、只の地面だけになつた。其の地面には赤黑い茨の樣な草が限なく生えてゐる。初は蓼の種類かと思つて、橋本に聞いて見たら、橋本は直ぐかぶりを横に振つた。「蓼ぢやない、海草だよ。」と云ふ。成程平原の盡きる邊を、眼を細くして見窮めると、暗くなつた奥の方に、一筋鈍く光るものがある樣に思はれる。「海邊かな。」と橋本に聞いて見た。其の時日はもう暮れ掛つてゐた。際限もなく蔓つてゐる赤い草の彼方は、薄い靄に包まれて、幾らか蒼くなりかけた頃である。明ら樣に目に映るすぐ傍をよく〳〵見詰めると、乾いた土でない。踏めば靴の底が濡れさうに水氣を含んでゐる。橋本は「鹹氣があるから、穀物の種が卸せないのだ。」と云つた。「豚も出ない樣だね。」と余は聞返した。

汽車に乘つて始めて滿洲の豚を見た時は、實際一種の怪物に出逢つた樣な心持がした。あの黑い妙な動物は何だ。」と眞面目に質問した位、異な感じに襲はれた。それ以來滿洲の豚と怪物とは離せない樣になつた。此の薄暗い、苔の樣に短い草ばかりの、不毛の澤

地の何處かに、あの怪物は屹度點綴されるに違ひないと云ふ氣が中々拔けなかつた。げれども、一匹の怪物に出逢ふ前に、日は全く暮れて仕舞つた。目に餘る赤黑い草の影は、次第に一色の夜に變化した。たゞ北の方の空に、夕日の名殘の樣な明るい所が殘つたのである。さうして其の明るい雲の下が、目立つて黑く見える。恰も高い城壁の影が空を遮つて、長く續いてゐる樣である。

余は高い此の影を眺めて、何時の間にか萬里の長城に似た古迹の傍でも通るんだらう位の空想を逞しうしてゐた。ずると誰だか、此の城壁の上を驅けて行くものがある。はてなと思つて、少時するうちに、又誰か驅けて行く。不思議だと思つて、瞬きもせず城壁の上を見詰めて居ると、又誰か驅けて行く。どう考へても人が通るに違ひない。無論夜の事だから、どんな顏の、どんな身裝の人かは判然しないが、比較的明らかな空を背景にして、黑い影法師が規則正しく壁の上を驅け拔ける事は確かである。余は橋本の意見を問ふ暇もない程面白くなつて、一所懸命に、眼前を往來する此の黑い人間を眺めてゐた。同時に汽車は、刻

刻と城壁に向つて近寄つて來た。それが一定の距離迄來ると、俄然として失笑した。今迄慥かに人間だと思ひ込んでゐたものは、急に電信柱の頭に變化した。城壁らしく横長に續いてゐたのは大きな雲であつた。汽車は容赦なく電信柱を追越した。高い所で動くものが漸く眼底を拂つた。（滿韓ところ〴〵）

姉崎嘲風
名は正治。東京帝國大學教授。文學博士。